

---

# Lyrical world ~海のさざめく街に迷う~

sam

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Lyrical world ~海のせせらぎ街に迷う~

### 【ZPDF】

Z0738Z

### 【作者名】

sam

### 【あらすじ】

ある冬の日、高校生の少年（主人公）はいつも通りの日々を送っていた。普通に学校に行って、友達と談笑して、そしていつも通り、変わりのまったく無い現実に少しだけガッカリして。

その帰り道、常々利用しているバスに乗り込んで、家への帰路を辿っていると、うっかり寝過ごしてしまい、《終点》まで運ばれてしまう。見慣れない海岸線。広い浅橋。脇目も振らず思い切り衝突してきた一人の少女。

反動でぶちまけられた少女の荷物には名前が書き込まれていた。

そこには確かに、「高町なのは」と。

一体ここはどうなのか、何が起きていているのか、自分がするべきことは何なのか。

迷いながら、それでも少年は、選び、進んで、『進めて』いくしかない。

転生？ 幻想入り？ 異世界トリップ？ いいえ、これは『迷子』です。巻き込まれただけなんです……！

今のところは毎週日曜更新、詰まつたら随時更新。

## はじめての望み（前書き）

生まれてこの方、僕は迷子になりやすい体质を持っている。

この、生き物としての生に於いて最も不必要だと<sup>お</sup>言い切れる僕の天性の素質は、これまでの十六年間の人生に渡つて度々僕を苦しめてきた。通い慣れたはずの通学路もふとしたきつかけで知らない路地に迷い込むし、近所のスーパーでのおつかいも品物を探している最中でスタッフオンリーの場所まで行っちゃうし、酷いときには自分の家のはずなのにここがどこだか一瞬分からなくなる。公共の場で立ち入り禁止区域にうっかり足を踏み入れそうになる」ともしばしばだ。

おかげで迷っている内に時間が過ぎ去つて遅刻はするし信用は落ちるしで、僕の人生は他でもない僕自身に壊され、ズタボロにされ続けてきた。

正直、疲れていた。

そんな訳で、僕の元々の性格と性質も手伝つて友達も多いほうではなく、僕は休日はもっぱら家に籠もつてアニメを見るような少年だった。ジャンルは主に美少女系。シリアルでもコメディでも面白くて可愛ければオッケー。後半部分は言つてしまふと家族にも煙たがられる。まあ当然といえば当然だが、しかしそく考えてみてくれ、

僕がこんな趣味を持ったということは両親のどちらかも同じような趣味を持っているということなんだぞ、血筋によるどうじょうもない宿命なんだぞ……！

ともあれ、外の喧騒を離れ、わかいんきょ若隱居じみた時間の中でも見るアニメといつのは、とてもエキサイティングだった。

かわいい声で飛んだり跳ねたりする女の子達は、僕の心に潤いをくれた。特に魔法を主題とするシリーズには胸を打たれたものだ。可愛いだけではなく、胸の内に様々な決意と想いを秘め、我が道の妨げとなる障害を撃ち抜いていく、設定上の年齢からしてもかなり無理あるんじやねでも可愛いからいいよ、と多くの人々を魅了した日本の誇るタイトルだった。

ゆえに、僕がその世界に憧れたのも無理はないだろう。年齢的にもそういう時期などと周りの人間も納得してくれるはず。実際、成長の過程で僕はそれが叶わないことをよく理解していた。時にかなり悶絶して枕を濡らしたほどだが。

そう、それが叶わない望みであることはもちろん解かっていた。所詮は三次元の人間がつくった創作物、行けようはずも無いことは明白なのだ。そんな事を考えている時点で既にある種の病気なのだ。

だけど、だからこそ。

僕は、『あの世界』に憧れていた。

その日は、実に普通の日だった。

いつも通りに退屈な授業を右から左へ受け流し、日常生活にはおよそ不要な情報に詳しい友人の言葉はキツチリ脳内にメモし、持参した新発売のゲームソフトでモンスターを狩りに行ったりと、本当に、何ら変なところも無い高校一年生の男子たる生活を送っていた。最近の高校生なんてこんなものである。

今的生活が楽しいか、と問われれば、僕は「それなりに」と答える。不満も何もない、一介の男子高校生としては妥当な生活を、僕は気に入っていた。

贅沢を言わせて貰えば、この辺りでかわいい美少女と曲がり角でぶつかって的なお約束なフラグ立たないかな……が正直な感想だが、叶わない夢は見るものではないことは熟知している。

「……ほう、然るに、お前は現在の現実に欲求不満つづけか」

そんな僕の心の吐露を聞いた数少ない我が友人・町田雄まちだゆうは、開口一番で僕の正直な感想を射た。さすがに長年の付き合いがあるだけあって、あまり要らない以心伝心があるようだ。

「まあ、正直言つて。つつても、ミースカの魔法少女が幕で空飛ん

でたらなあ、みたいなレベルだよ

「俺から見ればお前充分毒されてきてるぞ」

「もつと凄い人は現実すら見えてないから、僕なんかまだまさ」

「まさかその境地に至らうってんじゃねえだろうな」

ちなみに、雄は僕とは正反対の人間で、暇あれば外でランニング、悪天候であれば室内で黙々と筋トレが趣味という根っからのスポーツマンである。身体つきもそこそこで、イカツイとは言わないまでもしつかりした筋肉が付いている。実際、サッカー部の期待のエース候補もある。

そんな人物であるのに、何故か僕とこいつはウマが合いつ。幼馴染つて事もあるのだろうが、たまに暑苦しいのがキズだ。

それはさておき、今は下校中で、シーズンが秋から冬にさしかかっている昨今、部活がない雄と僕は仲良く帰路についている。

「そりや、雄には分からないだろうさ。僕という人間がいかにこの現実に不満や反感を持つてているかなんて」

「そうだな、可愛い彼女持ちで年中バラ色の俺にはさっぱり分からな」

「口口スツー！」

「うおつ！？ やめろ！ キャラ物のボールペンを振り回すな！  
しかも二刀か！？」

風を切つて唸る僕の剣尖を雄は手首ごと押さえ、僕の正気を引き寄せてくれた。

「あ……、ああ、ありがとう雄。もう少しでこの麗しい限定付録をお前の穢れた血で汚すところだったよ」

「俺の安否よりペンの安否か、さすがだなお前」

なにやら雄が不思議なことを言つてゐる。妬ましい男の命と一度と手に入らない限定グッズ、天秤にかけたら後者は人間が重力によつて地球に立ててゐるのと同じくらい当たり前では無いだろうか。まったく、たまによく解らないことを言つから困つたもんだ。

「ところでその限定品とやら、初めて見るな。お前の懐から出たもので見たことが無いということは、新作か」

「うん、映画館の販売店から。映画化したからね、今年の初めに」

今年の初めの頃に、もう一つの大御所アニメとほぼ同じタイミングで上映された有名な魔法少女アニメのグッズだ。僕が好きなヒロインが一人、純白のスカートを靡かせる茶のセミロングの女の子と、金髪ツインテールの女の子、そしてその子達が愛用する、金のフレームに真紅の宝玉、金色のクリスタルを核とする漆黒の戦斧のミニチュアストラップが付いている。もう一方の映画はロングセラー原作の待望の映画化版だつたのだが、もちろん僕は両方見に行つた。

「全然新作でもねえじゃねえか。 あ、思い出した。冬休みの終盤も差し迫つてきているというのに、おまけに後もう少しで受験というタイミングのクセに、無理して見に行つたアレか。それにしてもよく受かつたなお前」

「愛があればこそ、だよ。それにこの学校はレベル低かつたからさ、実際は大して勉強しなくても受かつたんだよねー」

「俺は家が近所だったからって理由で志望したんだっけか。お互い不真面目な理由だな、必死になつてここ受けた奴もいるだろうし」「優等生は辛いよね」

「お前の成績でその台詞がよく吐けるな」

そう、僕と雄は今春、高校生になつたばかりだ。志望理由は前述

の通り、「樂をしたかったから」である。

実際こういった理由で高校受験する人っていうのも多いそうで、入学後に苦労しなくとも授業に付いて行けるように敢えてレベルを落とすのも一つのやり方らしい。卒業手前で苦労すること間違い無しではあるが、それを解かっていながらそこを選んでしまうのが若さって奴である。

僕としては、まあ楽したかったもあるんだけど、趣味と勉強の比率がなるべく前者に傾くようにしたかったからだ。僕が愛する一次元への求愛行動とは非常に金と時間がかかるジャンルで、小遣いの前借りやバイトで工面しないとならない時もある。ゆえに、将来は履歴書以外に何の役にも立たない勉強なんぞに時間を取られては駄目なのだ。あくまで『愛』を貫く、それが僕の生き様。進路指導の先生に正直に言つたらぶつ飛ばされた過去を持つ生き様だが、気にしては駄目だ。

そうこうしているうちに、僕はいつものバス停まで着いた。距離的に家が近い雄とはここで別れている。

「じゃな、コウ。まさかとは思つが、道に迷うなよ」  
「百回は聞いたし、もういくらなんでも迷わないよ。寝過ごしでもしなければね」  
「なら、寝過ごさないように注意することだ」

早速背を向けて軽く走り出した雄に苦笑しつつ手を振つて、間もなく到着した路線バスに乗り込んだ。手近な席にすわつて座り、あまり質の良くない背もたれに身をうずめる。

暦は終盤へと至り、外気もすっかり寒くなつたので、バス内は少し暑いくらいの暖房が焚かれている。

不規則に揺れる車内。暖房でボーッとしている頭。学校帰りで疲れている身体。

眠くなるのは実に自然な作用だった。

さつき注意されたばっかりじゃんかよ、と内心で呆れつつも、この睡魔には勝てそうも無い。もともと僕は所有欲などの本能に従つて生きているので、生理的な反応にはめっぽつ弱いのだ。徹夜もよほど余裕が無ければ使えない。一夜漬けは得意なんだけど。

などと色々考えているうちに段々と目蓋が重くなってきて、思考も緩やかに減速していつて、いつしか僕は、夢の中へと誘われていた。

不思議な夢を見た。

そもそも夢と言えるのかどうかも定かではない夢で、その内容が『虹色の輪が延々と広がっては消え、広がっては消えていく』というものだった。しゃらん、というような鈴音と共に波紋のように七色のサイケなリングが広がって、僕の視界から消えたと思つたらまた新しく音と輪が広がる。それが長々と続き、いつたい何の催眠術だよと無意識下に思つていた。

やがて輪の広がりが徐々にスピードダウンしていつて、僕の視界いっぱいの大きさに固定されるようになった。その内部に、今度は四角形がぐるぐると回つて一つほど展開され、さらにはその間にも輪が複数広がつて。

そこで不意に、景色が途切れた。夢の始まりが唐突なら終わりも唐突だ。

突然身体がガタン、と揺れ、驚いて目を開くと、困ったような表情の男性が目の前にいた。白い手袋、硬質そうなイメージを受ける帽子、制服。運転手さんだ。

寝惚け眼で何事かと訊くと、

「えーとなお兄さん。もつ終点だよ？」

とのことだった。

さらに驚愕しつつ外の風景を見ると、そこには見慣れた住宅街とぽつんと立つ停留所の目印ではなく、まったく見知らぬ街だった。僕の住む街は少なくとも内陸地で、こんな綺麗な海岸線がある街では決して無い。

僕はひとまず運転手さんに謝ってバスを降り、大丈夫かと親切に心配してくれる運転手さんも丁重に断つて、とりあえずその地へと踏み出した。

潮の匂いが微かに漂う街。コンクリートの灰と自然の緑と海の蒼あおが程好く混ざつていてる海岸の街のようだ。いつも使っている路線のバスで行けるところにこんな場所あつたかな、と思いつつもう少し歩いてみる。好奇心もさることながら、幸い日はまだ高く、もう一時間もすれば暗くなるだろうが、その時はその時だ。今の時代はケータイのGPSもあるから、道に迷つて野宿なんていう悲惨な目に遭わずに済むだろ？

しかし、と、僕は今後をビリするかの計画を練り止め、改めて周囲を見渡した。

この風景には、僅かに既視感がある。

この海岸線といい、建造物といい、何から何までつい最近に見た覚えがあるのだ。はて何だつたかな、と記憶の糸を辿つても、デジヤヴ故に思い出しそうもない。しかし、確かに見覚えがある。外にほとんど出ない僕が、外の風景に感じる既視感

「……………あ

と、糸の端を掴んだような感覚がぽつと湧いた、  
瞬間、

「ゴズンツー！」と結構強めな衝撃が、僕の左脇腹をとらえた。

「きやあつー？」  
「ぐほおツー？」

可愛い悲鳴と似つかわしくない衝撃に僕は奇妙な声を出しながら吹っ飛び、突進してきたその人物と同じくすっ転んだ。特に突っ込んで来たほうの荷物が派手にばら撒かれ、その内のA4ノートの一つが足元に転がってきた。

痛む脇腹としたか打ちつけた後頭部に目をしかめながら、僕はひとまず心配の声を掛ける。

「つつ……だ、大丈夫！？」  
「いたたあ……ふあ、はい、ごめんなさい！  
前見えてなくつて……  
わ、わわ」

突撃犯はなんとも可愛らしい声で僕に謝罪を送り、慌てて辺りにぶちまけられた自分の荷物を拾い始めた。見渡してみると、あるのはペンケースにノートや教科書ばかりだ。恐らく小学生だろう。それにしてもこんな綺麗な声を持つているとは、様々な声優ファンでもある身としては未恐ろしい娘だなと勝手に思つてみたり。

痛みも忘れた些<sup>さ</sup>末<sup>まつ</sup>な感動もひとしお、僕はすぐにその手伝いに取り掛かった。と、その子が遠慮がちに言つてくれる。

「あ、いいですよ、これは私が……」

「いや、いいよ。大丈夫だから」

その声を制止するように上っかぶせつつ、僕は手近な教科書とノートを片つ端から拾つた。対応する学年の枠を見ると、どうやら小学三年生らしい。口リコン涙目いや歡喜だな、と感じつつ、その子に荷を渡していく。一人でやると早いもので、土埃つちほりを払つたりなんかしたタイムラグを含めても一分はかかるなかつた。

「はい、どうぞ。今度からは気をつけるようにね」

「は、はい。本当に、すいませんでした……」

年上らしく気取つたようなセリフに、消え入りそうな声で謝つてくる少女。可愛いなあと思いつつ、ふと目線を手元にやつた。本当に、何の事はない拍子で。

『国語 3年\*組 高町なのは』

ガン、と脳天を強烈な一撃に当たられたような衝撃が身体中を奔つた。

高町なのは。

間違いなく、そんな字が、実に可愛らしい字体で書かれていた。バツ、と顔を上げて、思えばよく見ていなかつた少女の顔を見る。くるくると大きな双眸。整つた顔立ち。栗色味がかつた髪を頭の両サイド、白いリボンで縛つてある短めなツインテール。制服は純白、胸元に怪獣の足跡のようなマーク付き。

……何が既視感だ。それどころか、僕はこの世界を何度も見ているじゃないか。

デジャヴなんてものじゃない。これは、紛れもなく

「……あ、あの、何か……？」

「はっ！　あ、いや、ごめん！　何でもない！」

頭の中がぐるぐると渦巻いている僕を怪訝に思つたが、少女は不思議そうに訊いてくる。一気に意識を引き戻された僕は必死にジエスチャー付きで弁明するも、しまつたこれじゃかえつて不自然だと感じつつ、僕は仮にも数年先輩の者として、咳払いをして調子を整え、彼女を促す。

「さ、さあもうお帰り。」つちは別に気にしなくていいから、うん「は、はあ……それじゃ、その、失礼します。あの、本当にすみませんでした！」

気にしないで、と声をかける隙もなく、少女は勢いよく一礼してから一目散に駆けて行つた。そんなに僕の顔が、というか存在が気味悪かったのだろうか、その走力は脱兎の如くである。

「……まあ、いきなり見ず知らずの人にぶつかっちゃって、おまけに散らばった荷物の片付けとか手伝われたら、気まずくなるか」

少なくとも僕ならば家に帰つてからしばらく悶絶するだろうが、しかし今はそんな事を気にしている場合じやない。立ち上がり、僕は周りを見渡しつつ歩き始める。主に上に視線を向け、必死にアレを探す。国道沿いの道にならば必ず設置されているはずのアレを。

やがて、道路の端に立つて電柱の上に、それを見つけた。青い下地に、シンプルな白い矢印が組み合わさつた看板　道路標識

である。自動車の運転席から少し田線を上へやると、簡単な道案内をしてくれる地図だ。

「…………」

「…………これより100メートル先…………」

海鳴市

思わず音読してしまったのは、あまりの驚幅に脳が何の自制もかけなかつたからである。

海鳴市。僕が知る、この世のどこを探つても絶対に実在しないと

踏んでいた、架空のはずの街。  
高町なのはとここの少女、海鳴市とここの名の街。僕の渴望の先にある目的地を指すキーワードが一つ。そしてそこから広がっていく、僕の知つてこる世界。

素直な疑問が、浮かぶ。

「…………」「…………」

……果たしてこれが、一体何を意味するのか、また僕にとってどのような意味があるのかは、今でも解からない。

ただ、僕は空を見上げ、呆然と立ち尽くすしかなかつたんだ。

思考はすっかりショートしていた。

手から鞄かばんが音を立てて落ち、今度は僕の荷物がぶちまけられた。

皆様おはよのりとなます。

さて今回は、作者個人的には珍しい処置として、一話ぶんを短め（当社比）に小分けして出していこうと思うております。イメージとしては、アレだ、DVDのチャプターみたいな感じ。サブタイトルで話の展開が大体どちらへんのかを解かりやすくしてみようかなど。逆効果だったら下座します。

我慢出来ずフライングしてしまったで御座るの巻

ではどうぞ。

さて皆さん、あなたがもし『自分が心の底から願っていたことが叶った瞬間』に立ち会つたら、あなたはどうするだろうか？

例えば、好きな音楽グループにバッタリ会えたときとか、好きな作家のサイン会が偶然近所でやつてたときとか、念願のライブのチケットが取れたときとか、片思いをし続けてきた相手に告白されたときとか。言わば『心の底から望んでいて、でも高確率で叶わないだろう理想』だ。

ちなみに、二次元をこよなく愛して止まない人種の僕の場合は『好きなアニメや漫画の世界に行くこと』となり（一部の人間の間ではこの行為を？幻想入り？と呼ぶ）、リアクションとして『奇声を上げて後々絶対恥ずかしくなるだろうテンションで暴れること』となる。かなり特異で自分でもおかしいと思える反応だが、実際にこういった反応に及んだ経験が少なからずあるので払拭しきれなかつたりする。いや、少し、少しですよ？ そんな頻繁にやつてるわけじゃないんですよ？

それはさておき、僕は現在、この質問と全く同じシチュエーションを体感している。

すなわち、『最近のお気に入りのアニメの世界に見事ダイブ成功』。

既視感バリバリの風景の街に立ち、その世界ではメインヒロインの座に君臨する少女と何のフラグかぶつかつた。

これを夢の体験と言わずして何と言おうか。本来であれば、僕はこの状況において「ヒヤツホオオオオウ！ 地球に生まれてよか

つた ツー！」とか、「お父さんお母さん！ 僕を産んでくれて  
ありがとう！ 今人生で一番嬉しいですツ！」とか、過去の自分  
であれば間違いないそうシャウトしていたのだろうが、  
今いつて、全くその気にはなれなかつた。

状況を整理しよう。そして検討するべきだ。何故夢にまで見た状況に置かれてなお、僕が発狂せずに済んでいるのか。

まず仮定として、僕が本来居たはずの『世界』と、僕が現在居座つてゐるこの『世界』を、前者を『あの世界』、後者を『この世界』と呼ぶことにしよう。その上でとりあえず考え方を整えてみる。

さしあたつてとりあえず、色々とおかしいことを列挙すると、まづ第一に、僕は何の因果か最近見たアニメの舞台である『海鳴市』に迷い込んでいる。道路標識で確認済みなのでこれは間違いない。

次に、何の冗談か携帯がまったく機能しない。インターネットブラウザやフォルダなどを開くことは出来るが、通話やメール、果ては地図確認までもが不可能になつてゐる。外部との通信手段が全て使えなくなつてゐるのだ。これでは迷子癖のある僕はおうちに帰ることすら吝かではない。

最後に、フラグイベントに似たような何か。

僕はつい先程、『あの世界』ではメインヒロインの一人であり、圧倒的な数のファンを有し、内に秘めたる強大な力から一部の信者に『白い魔王』とまで呼ばれる少女・高町なのはと出会つた。さらに一体どんなお約束か、彼女は軽トラ並の突進力でもつて僕の脇腹に頭突きしてきた。これがもし朝の通学路で年齢の差も大して無ければ

れば間違いなく恋愛ルート一直線だ。勢いが軽トラ並みであるあたりに彼女には違った意味での将来性を感じるが、ああでもあの『彼女』と付き合えてウフフーなことになれるんだつたらもうロリコンでもいいかもなあ。未だに痛むこの脇腹に僅かな幸福感が混じつていると自覚している辺り片鱗は垣間見えていたとか、ええい埒<sup>らち</sup>が明かん。

ともかくだ。

以上、この三點が、現在の僕に降りかかっている不可思議イベントの全容だ。客観的に物申させてもらえば「これなんてギャルゲー?」と全身全靈をもつてツツコみたい。というか少し前にホントに言つた。周りに人がいないのを良いことに高らかに叫んださ。何か問題でも? だってそうでもしないと僕間違いなくぶつ壊れちゃうよマジで。もう壊れてるのかもしれないけど。だつて、こんなのだ。

現実的じゃ無さすぎるだろ?!

信じろという方が無理だ。バスで居眠りしてたらうつかり見知らぬ終点へと至つてしまい、その先がファイクションであるアニメの世界? ふざけるな、一体どういうドッキリだ。隠しカメラはここか。プラカードを持ったスタッフはどこにいる。頼むから出てきてくれ。と、言いたいのは山々なもの、実際これが現実(らしい、という域を出ないが)なのだから、文句を言つても仕方がないと、そういうことなのだろうか。

はあ、と、重苦しい溜息が嫌でも洩れる。

とこひで、僕は現在、『海鳴臨海公園<sup>りんかい</sup>』にある休憩所のような屋根つきの小さなベンチに佇んでいる。時刻は既に夕方、真っ赤に燃える日の入りがなんとも美しい。今は解からないことばかりだけどちよつと歌いたい。別に誓いは立てないけど。

緑の芝生を尻尾に、正面から夕日を見つづ、考える。

(これから、どうするべきなんだろ?)

外部との通信手段が使えない　これは恐らく、何者かの電磁パルス的な何かが妨害しているのだろう。通話や電子メールはそもそも機能せず、ブラウザを立ち上げてのインターネットには接続できるけど、よく利用していた掲示板などの「ミニアーティ」を使えないのがその証拠だ。そして情報を与えないといつことは、出入りも不可能になっているはずだ。道しるべを『見えない』せに、のこのこ帰らせるミスを犯すなんて馬鹿はいない。

ちなみにこれは僕が長年アニメや漫画を見ていたことによって培われたある種の予想能力で、これによつて数々のギャルゲーの分岐を乗り越え、見事ハッピー エンドまで導かせた。たまにバッドエンドもちゃんと攻略するが、大概の場合は『ここで何を選べばどうなるか』で乗り切つた結果、ほとんどの場合良い方向に事が進む。お手軽な現実逃避にも使える。鍛えればたぶん競馬とかにも使える。経験値つてどこで重要になるか分からぬ。

別名？厨一病？とも呼ばれている立派な社会問題だがそれもさておき、ならばどうするべきかと考える。

恐らく僕は何者かの手によつてこの街に誘われた。考えられる常套ルートとしてはそれが一番有力だ。そこに一体どんな目的と意味があるのかは不明だが、しかしこのまま黙ついてもここで凍死して野垂れ死ぬだけだ。あのアニメの一二期の終盤ではこの地域にも立派に雪が降つていたし、海沿いなだけあってこの辺りは相当に冷えうるだろう。その証拠に、海から吹き込んでくる秋の潮風がこんなにも冷たく。

……秋？

そこでふと浮かんだ違和感に疑問が湧き、改めて自分の感覚と照らし合させてみる。

確かに、肌寒くはある。しかしそれは夏から冬へと移り変わるときの感覚ではなく、むしろ真逆の冬から夏へ、段々と暖かくなつてくる、肌が微かに楽しみを訴えてくるような。

慌てて、左手首に巻きつけた電波時計を見る。携帯にも時刻機能は搭載されているが、僕には何故か同じ機能を持つものを二つ以上持ち歩く習性がある。デジタルとアナログを使い分けるためだ。時計もデジタルだけど。

時刻はまだいいだろ？ 四時三十七分。問題は現在の日付だ。

「……………どうしたことだ……………？」

今日何度目かの驚き。

なんと、四月一十六日らしい。バリバリの春だ。ピッカピッカの一年生が誕生する時期である。

恐らく最寄りの電波塔からの情報をキヤッチして表示しているのだろうが、それと合わせて、また仄かに違和感が湧いた。

……四月の末……脇目も振らず走ってきた少女……。  
まさか。

そう、僕の感覚と予想が正しければ。

今晚辺りに、この地で彼女と彼が出会い、『物語』が始まる。

「……………！」

そうだ、僕の記憶が正しければ いざこかの山奥に結界が発生し、一人の少年が瀕死の重傷を負う。その翌日、通りがかつた一人の少女が彼を見つけ、病院へと連れて行く。その日の晩、少女は不可思議な目に遭い その後の人生の分岐点に至る。今年の初めに見た劇場版と地上波版アニメ、そのままのシチュエーションだ。

「ミックスも買つた僕の熱烈なる記憶に、粗鄙は恐りへ無い。

「…………」Jさんは

神の悪戯か、はたまた悪魔の罠か？

僕はある意味で、過去の歴史の最中にいるといつてこなる。では、僕が今置かれている状況はタイムスリップとか、そういう類の現象なのだろうか？

僕は今、過去にいるのか？ それとも似て非なる、パラレルワールドの更なるパラレルワールドなのか？

疑問は次々と湧いてくる。しかし、

「…………だけど…………」

だからと書いて、僕に一体何が出来ようか。

平々凡々たる一般人である僕には、当然の事ながら魔力もSFパワーも持っていない。運良く（？）現場に居合わせたとしても、僕がいたら邪魔になるだけだ。そもそも今晚の宿すら決まっていない身分である。何の力も無い高校生に一体何が出来ようか。

しかし、このまま何もせず、ただ茫洋と時間を食い潰すのは、僕の性根にそぐわない。というか、落ち着かない。

ならば、と僕は一番最初の疑問に戻る。これからどうするべきか、と。

「…………よし、ちょっとお茶してアタマ冷やそつ」

こんな状況でもしつかりと元ネタを引っ張つてこれる自分に感嘆しつつ、僕は重い腰を上げて、当てにならない記憶を頼りに歩き始めた。

目的地は もちろん、僕の同志であるならば、そして現地であ

るならば、何を置いても必ず一度は行きたい喫茶店である。  
そういう下心を芽生えさせられるような余裕は、とてもじゃない  
が無かつたけれど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0738z/>

---

Lyrical world ~海のさざめく街に迷う~

2011年12月5日19時57分発行